

利用者の声

私のアジア歴史資料センター利用方法

九州産業大学 クリストファー W. A. スピルマン



アジア歴史資料センターは、近現代の日本とアジア近隣諸国との関係などについて、当時の内閣、外務省、陸軍、海軍の公文書等の原本画像をデータベース化し、インターネット上で公開しているデジタルアーカイブです。

私がアジア歴史資料センターのサイトを使い始めたのは、3～4年前のことです。ここに掲載されている資料は、日本の国立公文書館、外務省外交史料館、防衛省防衛研究所に保管されているものであり、時代的には明治期から第二次世界大戦終結までの資料で非常に幅広い内容を網羅しています。アジア歴史資料センターのデータベースの存在は画期的であると言えます。なぜならこのデータベースが公開されたことによって、日本の歴史資料が組織的にインターネット上に掲載され、日本と海外の研究者がそれらの資料を簡単に入手できるようになったからです。それ以前には、資料の発掘という作業には常に困難が伴い、非常に多くの時間がかかるのですが、必ずしも作業の成果（探している資料の発見）が保証されているわけではありませんでした。いくら時間をかけて資料を探しても何の成果も得られないことも少なくありませんでした。そもそも、自分にとって必要な文書が存在するのかどうか、また仮に存在しても、それがどこに保管されているのかという事すらわからないことも間々あり、貴重な時間を無駄にすることも多かったのです。東京近辺に在住している人はともかく、地方（たとえば現在、私が住んでいる九州）に住む研究者は上京して、資料館から資料館へ、図書館から図書館へ転々と足を運ぶしかありませんでした。しかし多くの図書館を懸命に回っても、一日にせいぜい数ヶ所を訪れるのが限度である上に、資料館へ行って調べたところで探している資料がいくら検索しても出てこない場合もあり、精神的な苦勞やストレスも溜まりました。こうした経験をしたことのない歴史家はおそらく一人もいないことでしょう。

しかし今はこの画期的なデータベースのお陰で、確実に研究の効率は上がりました。無論、資料を探す手間が完全に省かれたわけではありませんが、資料の発掘が以前よりも簡単になったことは疑う余地はありません。東京近辺以外の地域ないしは海外に在住する研究者は、上京する前にまず資料の有無を確認することが出来るようになりました。またアジア歴史資料センターのデータベースにインターネットでアクセスして検索し、自分が探しているものが見つければ、これをダウンロードすることもでき

るため、わざわざ上京する必要もなくなりました。

もちろん、どうしても原文を見なければならぬ場合もあります。というのは時にインターネット上に公開された資料に印鑑や朱筆、鉛筆書きによる修正ないしは訂正が記されていて見づらいこともあるので、原文を見なければ重要な箇所を見逃す可能性もあります。ただ、それはあくまでも例外的なケースであり、まずほとんどの場合、わざわざ現物を確認する必要はないでしょう。

一部の研究者からは、掲載されている資料が本物であるかどうか確固たる証拠がないという批判もありますが、これは的外れの批判であると思われます。このような疑問が出てくると、実物の資料を見て比べる必要が生じます。アジア歴史資料センターのデータベースには、資料の原本が所蔵されている場所に関する情報が掲載されているので、必要に応じて真贋の確認も可能です。出版された資料についても全く同じ問題が起きる可能性があり、しばしば実物（原本）を見る必要が生じます。しかも資料の原本そのものの正当性が問われる場合もあり、本来、資料の真贋については細心の注意が必要です。まれに資料が偽造される場合もあり、1985年に起きたいわゆる「ヒトラー日記事件」が著名な事例として多くの人々の記憶に残っています。しかし原本の所在がはっきりしている限り、それを確認し検証することが可能です。

アジア歴史資料センターのホームページには、日本語があまり読めない利用者のために、英語、韓国語、中国語による説明もあり、データベースには日本語が出来なくても利用できる資料が沢山含まれています。データベースの大多数を占めているのは日本語の資料ですが、それ以外にも英語、フランス語、ドイツ語などで書かれた文書も多数掲載されています。例えば“Versailles”で検索すると、英語以外にフランス語の文書も入手することができ、また“Richard Sorge”で検索するとヒトラーの軍に対する演説などを閲覧することができます。このデータベースに含まれている幅広い資料に海外の研究者も簡単にアクセスでき、世界中、いつでもどこでも閲覧出来るようになったことは高く評価されるべきです。

ここで、私自身がどのようにこのデータベースを使用しているのか簡単に紹介してみたいと思います。アジア歴史資料センターホームページのデータベースの資料をパソコンで閲覧するにはdj-vuというソフト（プラグイン）が必要であり、まずこれをダウンロードしてインストールしておかなければなりません。この作業は極めて簡単で瞬間的にでき、一度インストールすれば2回目以降は同じパソコンからアクセスする限りこの作業を繰り返す必要はありません。

ホームページにアクセスすると、まずセンターの最新の情報（例えば、センター主催の催しや「インターネット特別展」についてのお知らせ、またはシステム停止の告知など）が掲載されているので、私は定期的これらに目を通すようにしています。しかしホームページにアクセスすると直ちに検索を始めることが出来ます。検索の仕

方にはいろいろあり、50音検索またはA-Z字検索、階層検索、キーワード検索など自分の資料探しに適った方法を選びます。このようにホームページの最初の画面から簡単に検索できるため、使い勝手は非常に良いです。例えば、「嘉納治五郎」というキーワードを入力して検索してみると19件出て来ます。そして1件目は次のように説明されています。「各種調査会委員会文書・臨時教育会議書類・二ノ一速記録綴自第一号至第十号」。この記述は文書の種類に関するものですが、嘉納治五郎が臨時教育審議会員であったことを知っていれば、この資料は嘉納の臨教審での発言に関するものであることが瞬時にわかります。嘉納の教育に関する見識について関心があれば、この資料を閲覧してみます。その他の嘉納の活動（例えば彼のオリンピック運動への関わりなど）に興味があれば、次の件名に進んで、その概要説明を読み、それが自分にとって必要な資料であるか否かを判断すればよいのです。いずれにしても、このデータベースによって嘉納治五郎に関する資料（自分の研究に役に立つかどうか別として）を瞬時に19件も閲覧することができるのであり、これを利用しなければ同じ資料を収集するのに何週間あるいは何ヶ月もかかってしまうことでしょう。

検索していて、出てくる件数が多すぎる場合もあります。例えば日本とポーランドの関係について調べようとして、「ポーランド」という言葉で検索すると2342件ほども出てきます。これらすべてを丁寧に見る時間はもちろんありません。このような場合には、さらに絞り込んで検索する必要があります。ここで例えば自分が関心を寄せている「昭和五年」に絞り込んで検索すると、44件にまで絞られます。

こうしたデータベースは、研究者の作業を簡単にしてくれているという意味で画期的です。日本の情報公開は他の先進国に比べて遅れているとか、日本の近現代史に関する資料は入手しにくいという批判をしばしば海外で耳にしますが、それは的外れの批判であると言えます。このデータベースがいかにユーザーフレンドリーで、日本の近現代史に関する貴重な情報を公開しているか、国内外の多くの人々に利用して実感してもらいたいと思います。またこのデータベースに含まれている資料は既に膨大な量に昇りますが、まだ資料全体の一部に過ぎません。今後さらに電子化の作業が進むにつれて、このデータベースに収められる資料の数も増えていくことでしょう。

私がこのデータベースをこれまで利用した範囲内で感じた欠点としては、主として次の3つがあげられます。一つは、現時点ではアジア歴史資料センターで公開している上述の三つの資料館のすべての資料がデータベースに含まれていないということです。つまり、データベースを検索しても、資料が見当たらない場合は、結局、それぞれの資料館に確認のため足を運ばなければなりません。しかし将来、データベースが拡大されるにつれて、このような問題も徐々に解消されることでしょう。

次にこのデータベースには国会図書館憲政資料室が参加していないため、憲政資料室に保管されている豊富な資料が一切含まれていないという問題があります。その理

由としては、一部の資料は寄贈した人の許可がないと複写出来ないなどの制約があり、インターネット上に公開することが出来ないからだとされています。しかし、こうした問題は一部の資料に限られたものであり、ほとんどの資料には、こうした問題は発生しないはずで、したがって部分的なデータベースへの参加は基本的に問題がないと思われます。また仮に制約があり、そのために直接閲覧出来ない資料があったとしても、データベースを検索すればその資料が憲政資料室に保管されていることがわかり、資料の大まかな内容がインターネットで紹介されてもそのこと自体特に差し支えはないはずで、オンラインで閲覧出来ないという但し書きを、そこに付け加えればそれでよいのではないのでしょうか。例えば「関屋貞三郎」と検索すると、憲政資料室に保管されている「関屋日記」が検索結果として出てきて、「寄贈者の意志によりインターネット閲覧不可。閲覧したい方は憲政資料室に申し込んで下さい」と表示されれば、利用者にとってそれだけでも大いに助かります。こうした問題が出来るだけ早く解決され、憲政資料室が部分的にでもこのデータベースに参加するようになれば、日本政治史を専門とする歴史家にとってたいへん有益でありましょう。

さらにもう一つの問題としては、センターの名称が「アジア歴史資料センター」であるにもかかわらず、このデータベースに含まれている資料の大半は日本の資料館に保管されている資料であるということがあげられます。おそらく「アジア歴史資料センター」という名称は、所蔵する資料の中にアジアに関する資料がかなり含まれていることに由来するものと思われる。しかし、現時点ではこのセンターはある意味でまだ「日本資料センター」ということに過ぎません。韓国、中国、台湾、フィリピン等のアジア諸国はもちろん、隣国のロシアにも立派な資料館があり、それらの書庫には沢山の貴重な資料が保管されているはずで、これら海外の資料館がアジア歴史資料センターのデータベースに参加あるいは協力するようになって初めて真の意味での「アジア歴史資料センター」が誕生するのでありましょう。東アジア地域の歴史を研究し、その歴史に内在するさまざまな問題を解明するためにも、また東アジア地域の歴史家の交流・協力を促進し相互理解を深めるためにも、このような「アジア歴史資料センター」の実現が今後期待されます。近隣アジア諸国が積極的に参加するようなデータベースが構築され、それを通じた国際的な協力体制が確立されることを望んでいます。

クリストファー・スピルマン：九州産業大学国際文化学部教授。ポーランド・ワルシャワ生まれ。専門は日本近代政治思想史。